

## 「古文書が伝える四街道の歴史展」の解説

### はじめに

今回の展示会にご協力をいただきました四街道市長岡地区の井岡家は、江戸時代を通じて市域16か村のひとつである長岡村の名主や組頭を勤め、当主は治郎左衛門を名乗られた家です。明治以後も長岡村の用掛や、連合戸長役場の戸長など行政に携わり、旧千代田村の学務委員や農会理事などの公職にもついています。

過去5年間の市史編さん協力員による調査・整理の結果、江戸時代の古文書や明治以降の公文書・私文書など、その資料は5300点にのぼり(別表1)、四街道の市史研究に欠かせないものとなっています。また嘉永2年の小金原御鹿狩文書は四街道市の文化財に指定されています。

今回はその中から13テーマに絞り込んで、江戸時代から明治時代までの資料90点を展示し、これまであまり明らかにされてこなかった四街道の歴史を、市民の皆様にご紹介いたします。この機会に、日ごろ目にする事のない古文書に親しんでいただき、歴史を通じて郷土愛を培う機会にさせていただきたいと思っております。

### 《展示テーマ》

1. 長岡村の概要
2. 佐倉藩の支配
3. 嘉永2年小金原御鹿狩～四街道に5300人の勢力人足
4. 村の土地と生産力
5. 長岡村の年貢の変遷
6. 庶民の道中日記～十助さんの大旅行
7. 江戸から明治へ
8. 村が変わる、自治体が変わる
9. 年貢から地租へ
10. “軍郷”四街道と戦争
11. 鉄道がやってきた
12. 学校が始まった
13. 長岡村の産物

### 1. 長岡村の概要

江戸時代の四街道市域には16の村がありました(別表2)。長岡村はそのひとつで、領主の交替時に提出する元禄14(1701)年の「長岡村指出帳」には石高72石8斗3升6合となっています。山梨村の700石や物井村の570石と比較すれば、ごく小さな村でした。

しかし嘉永2(1849)年の徳川将軍による小金原御鹿狩では、当時の名主であった治郎左衛門が、2000以上の村の中から105人の世話役のひとりに任命されています。

その長岡村の起立について、今回の調査で参考になる資料が発見されました。それが「長岡村誌」です。先祖とされる「長岡将監」は長岡(京都)に城を築き、帝都を守護していたが、出羽国庄内の井岡庄に移封され、その後印旛郡入野(現在の地)に砦を築き、近郷を治めた、その由緒により、この地を「長岡」、家名を「井岡」とした、その後帰農し、代々この地に住む、村民18戸は皆その末裔である、と。

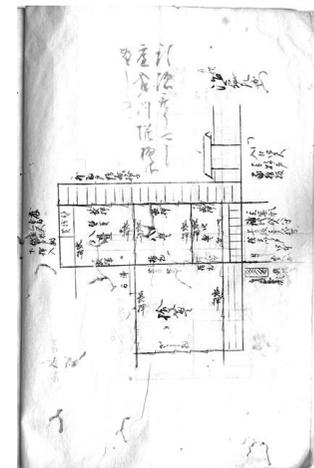


「長岡村誌全」表紙

### 2. 佐倉藩の支配

江戸時代初期における四街道市域の16か村は旗本の知行所だった村が多く、その領主も村ごとに異なっていました。そしてとくに初期の100年間は領主の入れ替わりが頻繁にありましたが、その変遷についてはあまり明らかにされていません。そのなかで長岡村の領主は初期のころから佐倉藩主の支配を受けており、老中格の大名である堀田家・戸田家・稲葉家・松平家が領主でした。

このコーナーでは、延享3(1746)年から幕末まで佐倉藩11万石(そのうち山形領4万石を含む)の藩主となった後堀田家の触書に焦点を当ててみました。とくに善政を



天保14年  
家作御改書上帳

しいた堀田正睦（まさよし）の子育奨励の触書や、天保改革時の家作取締りなど、興味深い資料があります。

### 3. 嘉永二年小金原御鹿狩

～四街道に5300人の勢子人足が集まる～

井岡家の先祖治郎左衛門は、嘉永2（1849）年3月18日に実施された第12代徳川将軍家慶による小金原御鹿狩の世話役に任命されたことから、貴重な史料が残されており、22点の古文書と収納されていた木箱、2点の大絵図が四街道市の文化財に指定されています。内容は華麗な御狩場ではなく、それに先立つ3日間の勢子人足による御狩場へ

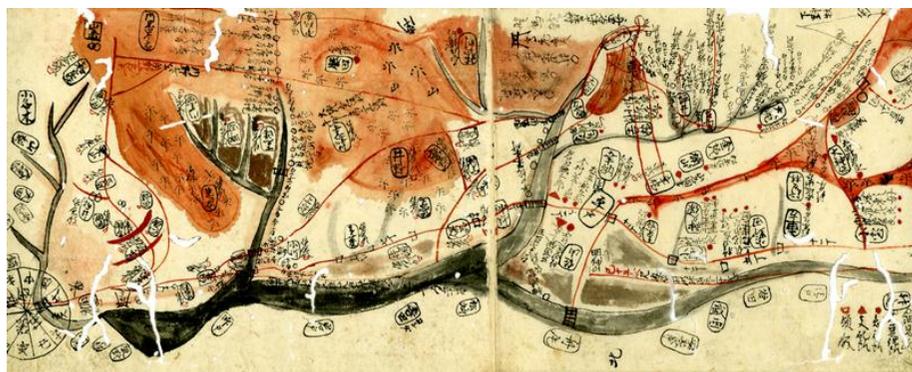
四街道に集まった勢子人足

揃所名	印旛郡		千葉郡		香取郡		合計	
	村数	人足	村数	人足	村数	人足	村数	人足
物井村香取前	25	498	5	183	49	1553	79	2234
和良比村山王山	26	420	6	71	39	974	71	1465
小名木村遠源太堤木戸内	18	349	16	280	25	912	59	1541
四街道市域の揃所合計	69	1267	27	534	113	3439	209	5240

※数値は、五の手は井岡家文書、小名木は千葉市稲生家文書によります

※四街道市域のみの合計は、勢子村数16か村、人足数268人です

※利根川下流の香取郡の村々から1泊2日で揃所に集まりました



嘉永2（1849）年小金原御鹿狩細見所小絵図

の追い立て方などの触書の写しや下調べなどにかかわる資料です。

この御鹿狩では、四街道市域の小名木川沿いに3つの「揃所」が設けられ、印旛沼周辺や利根川下流域の村々から5,300人の勢子人足が集まりました。彼らは前日のうちに揃所に集合し、幕府の御鹿狩役人の点呼を受け、村別に割り当てられた位置に着き横一線になり、御狩場（現在の松戸市）に向け野宿をしながら2泊3日の追い立てを開始しました。

### 4. 村の土地と生産力

関ヶ原の合戦に勝利した徳川家康は領地を確定し、家臣に知行地を与えるために検地を実施しました（慶長検地）。井岡家には原本ではありませんが、慶長7（1602）年実施の長岡村の検地帳の写しが残されています。

検地によって以後の長岡村の村域、および一筆ごとの土地の反別（面積）と石盛（反当たりの生産力）が決定され、納めるべき年貢の基礎となります。検地帳は一筆ごとの土地を、一定の順番に字名・反別（面積）・所有者などを列記したものです。

しかし検地帳の土地の順番は、異なる所有者の土地が並んでいる場合が多いので、所有者にとっては日常的に使用できるような帳面ではありません。そこでこれを所有者別に並べ替えて作成したものが「名寄帳」です。検地帳が村に残らなくても、名寄帳があれば実用に供するというわけです。残念ながら長岡村の検地帳は現時点では発見されていませんが、井岡家には「名寄帳」あるいは「銘々帳」と名の付く帳面が数点残されています。

長岡村ではその後も新田開発のたびに検地が行われており、そのときの水帳（検地帳）も残されています。

### 5. 長岡村の年貢の変遷

慶長7年の検地で定められた石高を基準として、長岡村の年貢は決定されました。井岡家には、その後佐倉藩主となった戸田家・稲葉家・松平家の年貢割付状が残されています。

延享3（1746）年には佐倉藩主が後堀田家に変わりますが、基本的には過去の領主の年貢政策が受け継がれていたことが分かります。しかし、同じ小名木川流域で稲作を営む物井村と比べると、江戸時代を通じて、生産力の指標となる石盛（1反当りの収穫力）の等級が異なり、

年貢率すなわち税率も高くなっています。佐倉藩の年貢政策が地域によりまた村により一律ではなかったことが分かります。

年貢は「年貢割付状」で通知され、12月中旬までに上納し、その証明として翌年3月には領主から「年貢皆済目録」が公布されます。

(長岡村の年貢率) ※幕府は「四公六民」税率40%を標準としていました。

元禄	1	(1688)年	60.0%	戸田家
宝永	2	(1705)年	52.0%	稲葉家
享保	9	(1724)年	55.5%	松平家
寛延	1	(1748)年	54.48%	堀田家
文久	3	(1863)年	54.56%	堀田家

## 6. 庶民の道中日記～十助さんの大旅行

江戸時代は庶民が領地を離れることを許されませんでした。しかし信仰のための旅行だけは許され、江戸後期になると庶民の旅行がブームとなります。井岡家にも数点の道中日記が残されていますが、その中でも天保14(1843)年の「諸国神社仏閣道中日記」は例を見ないほどの大旅行の記録です。

旅行日数163日、歩行距離凡そ4,600キロ、1日の歩行距離28キロ、参詣した神社仏閣271か所、名所旧跡150か所でした。作成者は保品村(現在の八千代市)の十助となっていますが、彼は翌年井岡家に入籍し、嘉永2年の御鹿狩で世話役を勤めた治郎左衛門を助けます。その後家督を継ぎ、明治30年に亡くなるまで100観音・出羽三山などを巡礼します。



天保14年  
「諸国神社仏閣道中日記」

## 7. 江戸から明治へ～明治新政府の布達～

井岡家には、時代が大きく変わる明治維新直後の新政府や千葉県令などの触書の書写が多く残されています。新政府や新たな地方自治体の行政

が激変する様子を伝える貴重な資料です。

慶応4年すなわち明治1(1868)年の正月早々に鳥羽伏見の戦いがあり、これに勝利して新政府が動き始め、国内外に国家の方針を打ち出します。展示の資料は、その直後に出示された新政府の触書の写しです。徳川幕府の前例を打消し、次々と改革が進められたことが分かります。新政府の意気込みが感じられる触書です。

## 8. 村が変わる・自治体が変わる ～名主から戸長へ、区から村へ～

新政府は領主支配による地方行政の変革のためにさまざまな政策を展開します。初代千葉県令柴原和は無駄な支出を省くために小村の合併を進めますが、村という強いきずなで結ばれてきた地域の行政は思うように進まず、変遷を重ねることになります。

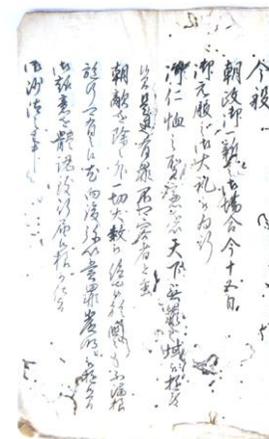
明治4(1871)年に戸籍法が公布され、名主が廃止されて戸長に改められ、大区小区制が実施されます。明治11(1878)年には郡区町村編成法により複数の村に連合戸長役場が置かれます。明治21(1888)年には市制・町村制が公布され、千代田村・旭村が誕生し、市町村制の基礎ができます。

しかし合併には村民感情の微妙な違いがうかがわれます。

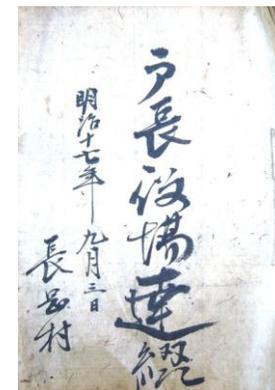
用掛りや戸長などの公職を勤められたことから、井岡家文書には当時の行政文書やいきさつを伝える資料が含まれています。

## 9. 年貢から地租へ

江戸時代の領主の財政を賄ってきた年貢は、廃藩置県後の明治新政府にとっても重要な問題となります。稲作の豊凶による不安定な年貢は、新政府の財政不安定を引き起こすため、明治6(1873)年には生産高に拘らず租税が徴収できる「地租」に変わります。しかし土地の測定



明治新政府の触書

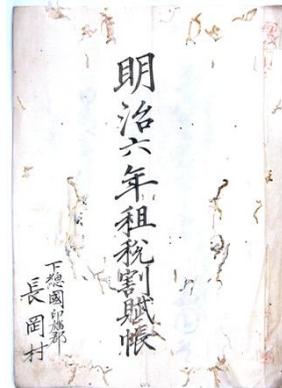


戸長役場達綴

や地価の確定に時間を要し、明治10（1877）年まで実質的には年貢が継続されました。

地租改正によって、明治新政府が抱えた巨大な累積債務の解消が可能となり、財政基盤を確固たるものにし、日本の近代化の促進にはずみがかかります。

井岡家文書は、地租改正に伴って実施された土地の測定・地価の確定の経緯を記録した公文書や、土地台帳などが含まれており、大きな改正に取り組んだ行政の動きを伝えています。

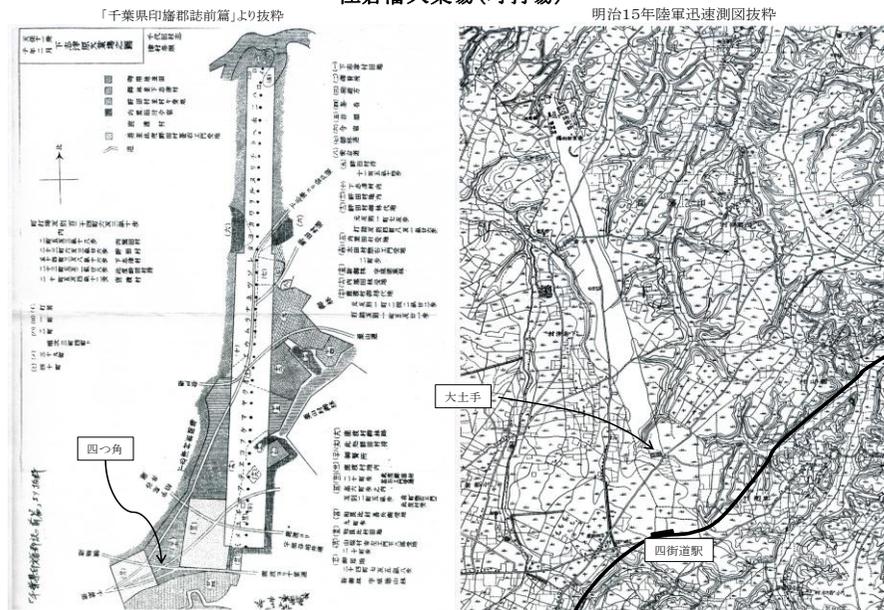


明治10年まで“年貢”

## 10. “軍郷”四街道と戦争

佐倉藩が天保11（1840）年に下志津原（北端に藩役人の詰所があった）に火薬場を開設したことから、玉拾いや往来留め・役人へのお茶接待などで村人がかり出されます。“軍郷”四街道の“さきがけ”です。

佐倉藩火薬場(町打場)



明治19（1886）年には同所に陸軍砲兵射撃の学校が設置され、明治30（1897）年には下志津原の砲兵学校が四街道に移転し、陸軍野戦砲兵射撃学校と改称されます。“軍郷”四街道の“幕開け”です。

この時から四街道の村と軍とのかかわりが強くなり、新しい町が形成されます。

井岡家文書の中には多数の書簡が含まれており、日清・日露の戦争に出征した兵士からの書簡が戦場の様子を伝えています。また両戦争を報道する新聞記事など珍しい資料も含まれています。



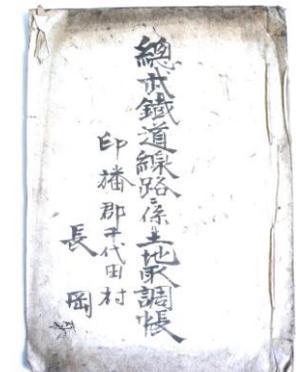
日露戦争出征兵士の書簡

### 11. 鉄道がやってきた

陸軍野戦砲兵射撃学校の開設に先立ち、明治27（1894）年に総武鉄道が敷設され、四街道駅が誕生します。これにより東京と四街道の距離が縮まり、全国各地への移動が容易になります。しかしその裏には先祖代々受け継いだ村民の土地が犠牲となり、補償問題が起ります。

明治44（1911）年には、翌年大正天皇となられる皇太子殿下が四街道の駅に降り立たれ、陸軍野戦砲兵射撃学校・野砲兵第18連隊への行啓を果たされます。そのときの村民のお出迎えの段取りを示す資料が残されています。

軍事目的によって敷設された鉄道でしたが、今日の四街道の発展に大きく寄与したことは間違いありません。



総武鉄道土地買収の帳面

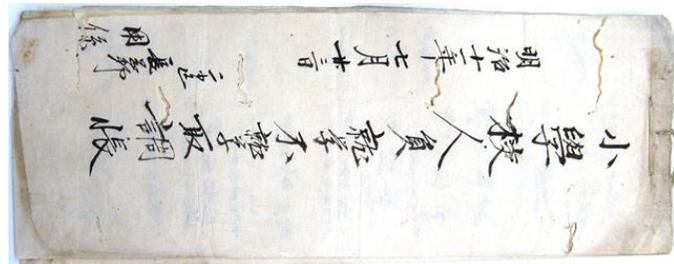
### 12. 学校が始まった

新政府は1小区に1校を目指すことを全国に奨励しました。明治5（1872）年の学制公布、明治8年の小学学齢布達、同12（1879）年の教育令、同19（1886）年の学校令、さらにその後の改正を重ねながら、教育の改革が進められます。

四街道でも明治6年には物井村の正福寺、同7年には鹿渡の善光寺の

境内に校舎が設けられ、小学校が開校します。寺の境内での小学校教育は明治の後期まで続きます。当初は授業料が負担できず、児童の就学が順調に進みませんでした。

児童の就学・不就学の調査資料、卒業証書、日記などが当時の教育の実情や学校生活を伝えています。井岡家のご先祖は学務委員を勤められたことから、当時の教育行政資料が多く残されており、教育史研究に役立つものと思われます。



明治11年の児童の就学不就学取調

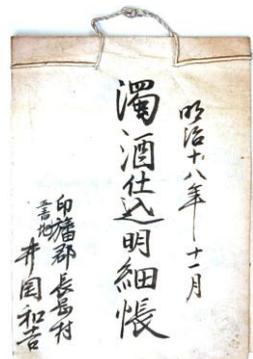
### 1.3. 長岡の産物～茶・煙草・酒・醤油・菓

明治時代の長岡の産業は現在とかなり異なる様相を呈していました。米や大豆などの穀物以外にも、長岡村を支える産物がありました。

明治10（1877）年11月に提出された「物産取調書一括」によれば、長岡村の生産物は米・もち米・大麦・小麦・大豆・粟・蕎麦・甘藷・菜種・実綿・製茶でした。

これらは統制されており、茶・煙草・酒・醤油については許可証や免許証が発行されました。

また村内には井岡家を含む数軒で菓の製造・卸業を営まれていたことも今回の調査で分かりました。



自家用酒製造の仕込帳

別表1

井岡家文書の内容分類別点数

区分	時代	分類	井岡家文書計	
			点数	構成
村文書	近世	領主支配	57	
		村政・訴訟等	37	
		土地・年貢・金銭	251	
		その他	40	
		小計	385	7.3%
	近代	布達・諸届等	910	
		教育	256	
		農業	357	
		土地・税務・金銭	714	
		その他	229	
小計	2,466	46.8%		
		年代欠	16	0.3%
		村文書計	2,867	54.4%
家文書	近世	家・書籍等	55	
		小計	55	1.0%
	近代	家・書籍等	493	
		書簡	699	
		土地・税務・金銭	1,027	
	小計	2,219	42.1%	
		年代欠	130	2.5%
		家文書計	2,404	45.6%
		合計	5,271	100.0%

別表2

「安政2年堀田氏領地高辻一覧」  
（「佐倉市史」巻1）抜粋

旧村名	(読み)	石高
物井	ものい	573.719
亀崎	かめざき	380.084
内黒田	うちくろだ	212.548
和良比	わらび	197.436
鹿渡	ししわたし	307.921
栗山	くりやま	279.557
長岡	ながおか	74.693
山梨	やまなし	701.940
和田	わだ	38.990
上野	うえの	46.356
小名木	おなぎ	318.158
吉岡	よしおか	446.965
南波左間	なばさま	104.809
中台	なかだい	255.852
中野	なかの	31.800
成山	なりやま	66.352
合計		4,037.179